

# 退職によせて

## 退職によせて

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
口腔保健学分野 教授 小野 和 宏



新潟大学歯学部の皆さまにおかれましては、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。2026年3月をもちまして定年退職を迎えることになりました。これまでのご厚情に感謝の意を

表すとともに、ひとこと、ご挨拶を申し上げます。

私は1986年に新潟大学歯学部を卒業し、その後、故 大橋 靖教授が主宰される口腔外科学第二講座（現 顎顔面口腔外科学分野）に入局させていただきました。また、大学院生のときは、故 島田久八郎教授のご指導のもと、口腔生理学講座（現 口腔生理学分野）に所属させていただきました。そのときからこれまで、新潟大学歯学部で長きにわたりお世話になってまいりましたが、私の教員生活は、仕事の内容から、大きく前半と後半の二つの時期に分かれています。前半の15年間ほどは、もうご存知の方は数少ないと思いますが、口腔外科診療、特に口唇口蓋裂治療にたずさわって、そこで得た知見や経験をもとに臨床研究に従事しておりました。その後、ご縁があり、2004年度に設置された口腔生命福祉学科に異動し、学生教育中心の生活を送ってまいりました。いま振り返ると、異動の直前にスウェーデンのマルメ大学に留学しており、新設された口腔生命福祉学科には専門課程が整備されておらず、留学先で見聞きした問題基盤型学習（Problem-Based Learning：PBL）をもとにカリキュラムを構築するようにとの歯学部の意向があったのかもしれ

ません。後半の20年間、つまり口腔生命福祉学科に移ってからは、当時、歯学部長でいらっしゃった前田健康教授のもと、教育担当の副学部長として、口腔生命福祉学科に限らず、歯学科を含めた歯学部全体の教育にたずさわらせていただきました。なお、2018年からの2年間だけでしたが、新潟大学で理事をお務めだった濱口 哲教授のご指導を受け、大学改革担当の副学長として、歯学教育だけでなく、大学教育全般について学ばせていただきました。

大学教員は教育・研究・臨床の3つの仕事をすべからく行うべきだ、とよくいわれますが、限られた時間の中で全てを、また一人で行うことは実際には難しいことです。私の場合は、意識してやってきたわけではありませんが、教員生活の前半は臨床と研究、後半は教育というように、時期により主な仕事が変わりました。また、数多くの教員や職員の方々、さらには学生さんや患者さんのご理解とご協力に支えられてやってきました。このような教員のあり方が望ましいものなのかわかりませんが、置かれた環境の中で、そのときどきの必要性や興味・関心にしがたって精一杯やっただけで満足しています。ただ、自身の所属分野である口腔保健学の研究に関しては、十分に貢献できなかったと感じており、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

これまでは、休日を含め、大学と家との間を往復するような毎日を送ってきましたので、退職後は、仕事との両立が難しく犠牲にしてきたことや、やりたくてもできなかったことを楽しむことができると思っています。老害にならないとも限りませんが、私でもお力になれそうなことがありましたら、どうぞお声がけください。最後になりましたが、新潟大学歯学部のますますのご発展を心より祈念いたします。

## 発信し続けた40年

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
口腔保健学分野 葭原明弘

### 〈はじめに〉

定年まで2年を残し、このたび新潟大学を退職することとなりました。教員生活は39年、学生時代を含めると実に45年を新潟大学で過ごしたことになります。40年にわたる私の研究と地域貢献の歩みを振り返り、次世代へのメッセージとしたいと思います。

### 〈研究の歩み〉

平成10年以降、私は「口腔の健康状態と全身の関係」を主軸に研究を進めてきました。たとえば、少数残存歯者では総摂取エネルギー量や緑黄色野菜・果物の摂取量が有意に少ないこと、さらに、骨密度の低下が歯周病進行に結びつくことなどを明らかにしました。こうした取り組みの成果として、245本の論文、417回の学会発表を行うことができました。

なお、先日嬉しいニュースが入りました。スタンフォード大学とElsevier社が科学分野で影響度の高い科学者を特定する研究者リスト「標準化された引用指標に基づく科学者データベース」が更新され、「世界で最も影響力のある科学者トップ2%」に選出されました。

### 〈地域歯科保健活動の歩み〉

新潟県では昭和56年から「むし歯半減10か年運動」が展開されてきました。私は大学教員として、また1000人を超える会員数を有した市民活動団体である「子供の歯を守る会」の実行委員長として、園・学校におけるフッ化物洗口の普及に尽

力しました。

私が主担当として行った活動で特筆すべきは、園・学校でのフッ化物洗口の実施を中心とするピュレーション・アプローチ、園・学校と地域の歯科診療所が連携したハイリスク・アプローチ、および全県ベースでの情報管理システムの総合的融合システムの構築です。その結果、新潟県は「日本一むし歯の少ない県」となりました。

さらに平成20年には全国初の「新潟県歯科保健推進条例」の制定に草案段階から携わりました。この取り組みは他道府県での条例制定へと波及し、平成23年の「歯科口腔保健の推進に関する法律」の制定へとつながりました。

### 〈研究や地域歯科保健活動に対する評価〉

今までの研究や地域歯科保健活動に対して多くの評価をいただきました。

- ・日本口腔衛生学会論文奨励賞（個人、平成12年）
  - ・日本口腔衛生学会学術賞“LION AWARD”（個人、平成15年）
  - ・元気にいがた健康アワード準グランプリ（私が代表を務めるNOP法人、平成28年）
  - ・公衆衛生事業功労者表彰（私が代表を務めるNOP法人、令和4年）
  - ・新潟県健康づくり功労者県知事表彰（個人、令和6年）
- 等

### 〈おわりに〉

「住民の健康寿命延伸」、すなわち「元気で長生き」を実現するためには、口腔の健康を抜きにできません。私たちに託された使命は非常に大きいと思います。私自身、これからも研究者としての好奇心と誠実さを胸に、次の人生を歩んでいきたいと思います。

## 退任によせて

### 口腔生命福祉学講座 神子島 旬 子

令和5年4月1日付けで新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学講座福祉学分野教授を拝命して3年、令和8年3月末日をもって退任いたします。

わずか3年ではありますが、歯学部教職員の皆様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

新潟県の福祉行政職員として27年間勤めたのち、こちらに参りました。当初は戸惑うばかりの毎日でしたが、何とかその勤めを終えることができました。教職員の皆様だけでなく、このような私の話でも一生懸命に聴いてくれた在学生の皆さん、その他支えて下さったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

新潟県の社会福祉実践の現場での経験しかない私は、就任以降ここで何をなすべきかをずっと考え続けてきました。そして、結局のところ自分にできることしかできないと思い至り、これまでの経験で身につけたソーシャルワークの考え方や姿勢を、自分を通して学生はじめ周囲に伝えていこうと心掛けました。

ソーシャルワークを研究する空閑浩人は「ソーシャルワークは、人々の尊厳が守られ、一人が大切にされ、誰も排除されない社会になることを、弱い人が弱いままで自分を無理して変えなくてもよい社会になることを、私たちが暮らす社会の現

在と未来がそのようなものであることを、願い続ける営み」と説明しています。こうしたソーシャルワークの考え方や姿勢を伝えるという目標に対し、何がどこまでできたのか、考えてみますが答えは出ません。しかし、この3年間たくさんの可能性をもつ学生の人生のひと時に関われたことは、私にとって幸いでした。ここでの学びが、いつか誰かの生活の支えになっていくことを願っています。

私たちは、さまざまな形で人から支えられなければ生きていけない存在です。私もまたそのような「弱い」存在の一人です。それでも、ありがたいことにこうしてここに存在することが認められました。私にできることはわずかしかなかった。だからこそ、自分にできることは誠実に行いたいと思っています。さまざまな生きづらさを抱え、人とうまくつながれず社会的に孤立している人々に対し、積極的に関わり、社会とのつながりをつくることが期待されているソーシャルワーカー。そのソーシャルワーカーの一人として、その時その場で自分に何ができるのかをこれからも考えつづけていきたいと思っています。

このたび、私は再び新潟県の社会福祉実践の現場に戻ります。

これまで、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

末筆ながら、皆様のご健康とさらなるご発展をお祈り申し上げ、退任の挨拶とさせていただきます。

## 定年に際して記しておきたいこと

生体組織再生工学分野 金谷 貢

約41年間、歯学部でお世話になりました。ありがとうございました。

最初、歯科補綴学第一講座（1補綴）、現在の包括歯科補綴工学分野で10年余りを、次に歯科理工学講座、現在の生体組織再生工学分野で30年余りを過ごしました。

以下、最も長く携わった「歯科理工学」に関連して常々思っていること<sup>1)</sup>について、また自己紹介的に「歯学部に勤めることになった少しユニークな経緯」を、最後に「歯科理工学の教育体制について感じていること」を記させていただきます。

・「歯科理工学」に関連して常々思っていること

歯がう蝕や歯周疾患でダメージを受けた場合、自己治癒力、投薬あるいはその他の処置によっても欠損歯質が再生することは巨視的にはなく、永久歯が喪失した場合に新しい歯が萌出してくることもありません<sup>1)</sup>。

そのため、歯科医療においては古くから歯の一部欠損に修復物を用い、喪失歯に対して義歯による欠損補綴を行ってきました。これら修復物や義歯は主に口腔の重要諸機能を回復できる点で義眼等とは一線を画します<sup>1)</sup>。

すなわち、義眼は「視覚」という眼の重要機能を回復できないのに対して<sup>1)</sup>、歯の修復物や義歯は「咀嚼機能<sup>1)</sup>（摂食機能）」、「発音機能<sup>1)</sup>（構音機能）」を回復できます。また、歯を食いしばれるようになることで「重い荷物を持ち上げる等の全身的機能」も回復できますし<sup>1)</sup>、さらには「嚥下機能」の回復を円滑にすることもできます。つまり、歯の修復物や義歯は、歯が関係する各種の重要機能を回復できるという観点から、人工臓器と言っても過言ではありません<sup>1)</sup>。（文献1）金谷 貢：医療材料の開発史。医学史事典（日本医学史学会編）。620-621、丸善出版、2022。）

このように人工臓器といえる歯の修復物や義歯は、各種歯科材料を加工・成型し、かつ頬や舌を噛まないように一定範囲内の大きさで、強さも確

保しつつ製作しなければなりません。そのため、歯科医師には歯科材料と材料力学に関する知識が必要不可欠であり、「歯科理工学」という医学部にはない理工学関連の教育・研究分野が歯学部には設置されていると考えられます。

ところで、私は高校生の頃、「なぜ医学部と別に歯学部があるのだろうか」と疑問に思っていました。その疑問を周りの先生方に聞いても、腑に落ちる回答にはずっと出会えていませんでした。しかし上記のように、「歯科疾患のかなりの部分を占める歯質欠損や歯の喪失に対して自己治癒力や投薬処置等で治すことはできないので、歯科治療の特殊性のために歯学部には歯科理工学という理工学関連分野が必要不可欠である。」それ故に「歯学部を医学部の中に組み込むことはそもそも無理なのだ。」と認識するに至り、自分なりに腑に落ちる回答を得た思いをしています。

・歯学部に勤めることになった少しユニークな経緯（自己紹介的に）

私の父は自宅で歯科技工所を開業していました。私が本学工学部の学生として専門教育を受けて1年ほど経った頃、帰省した際に父の仕事や技工室内の器材等を見ていて、工学部で勉強していることが歯科技工に役立ちそうな印象と、非常に強い興味も持ちました。爾来、工学部卒業後の進路として、歯科技工士学校で学んでから歯科器材のメーカーに就職するか、または実家に戻って父と歯科技工をするのも、人と違う道を進むことになって面白いのではないかと考えるようになりました。

工学部4年生になったときには、当時あった本学部附属歯科技工士学校を受験することに決めていました。工学部では研究室と企業の結びつきが強く、研究室の推薦で受けた就職先は確実に決定していました。いい就職先もたくさんありましたから、卒業研究を指導していただいた先生方からは就職への翻意を強く促されました。しかし既に腹は決まっていた。

本学部附属歯科技工士学校に無事入学し、2年の修業年限を終え、卒業式を迎えることができましたが、じつは卒業式の当日まで、実家に戻って父と歯科技工をやる算段をしていました。

ところが、歯科技工士学校卒業式後の祝賀会（1985年3月）において、1補綴の初代教授で、歯科技工士学校初代校長でもあった石岡 靖（きよし）先生から、「うちの歯科技工士学校は3年制の短期大学になって本学の医療技術短期大学部（医短、現在の医学部保健学科）に組み込まれる計画があります。それが2、3年のうちにも実現しそうだから、短大ができれば歯科理工学を担当する教官になりませんか。」と声をかけていただきました。また、「(就職して) いったん外に出ると大学に戻るのはいへんだから、短大ができるまでは1補綴にきて、研究・教育をやりませんか。」と仰っていただき、1補綴にお世話になることになりました。それまで就職先として決まっていたのが実家でしたから、すぐに連絡を取り、就職先を即日変更できたことも幸運でした。

しかしながら、それから2、3年後だったと思いますが、歯科技工士学校の3年制短大化は白紙に戻りました。石岡先生の記述によれば、「歯学部は昭和57（1982）年2月に「短大昇格準備委員会」を設置し、医療短期大学部は昭和60（1985）年2月に「歯科技工学科設立準備委員会」を、更にこれを受けて歯学部は昭和60年3月には「医療短大歯科技工学科検討委員会」等を設立して概算要求書の内容の整備を検討してきました。しかし、実現直前に歯科関連国会議員の反対運動で消滅させられた無念さは忘れません。」<sup>2)</sup>とのことでした。石岡先生から直接聞いた話を合わせると「歯科技工士学校の3年制短大化は「あとは予算がつくのを待つだけ」という実現直前段階までできていた」状況で消滅させられたことになります。（文献2）石岡 靖：歯科技工士学校と教官に捧げる惜別の辞。歯科技工士学校の歴史 閉校記念誌（新潟大学歯学部附属歯科技工士学校編）。4、プライムステーション、2005。）

そのため私はそのまま1補綴に在籍させてもらいました。研究面では工学部学生時代にきっかけをつかみ、1補綴で既に取り組んでいた、窒化物

セラミックスを歯科鑄造に応用して補綴物表面の改良を図るテーマを引続き進め、また教育面では当時の全部床義歯学と部分床義歯学の実習を担当して（歯科技工士学校の実習内容もほぼ同じでしたので指導内容的にはあまり無理なく）、結局10年余りお世話になりました。その後は、当時の歯科理工学講座の初代教授・塩川延洋先生の定年に伴い、理工の先生方が順次昇任して一つ空いた助手の席に移動させてもらい、理工での30年余りが始まった次第です。この移動は理工の第二代教授の宮川修先生と1補綴第二代教授の河野正司先生にお計らいいただきました。

・歯科理工学の教育体制について感じていること  
私は定年後、非常勤講師としてお手伝いしますので、次年度の理工関係の学部教育はこれまで同様、教授の泉健次先生との2人体制を何とか維持できます。しかし、理工が担当する教育の質と量のほか、評価の対象にもならないけれどやらなければならないたくさんの仕事を（とくに基礎系分野では）非常に少ない人員で負担しなければならないこと等からすると、正規教員2名の体制でもマンパワーが足りないはずと感じていました。できれば、正規教員が常時3名はほしいところです。しかし今の情勢ではそれは無理そうなので、少なくとも正規教員を2名は確保した上で、それらの教員が定年になる3、4年前には3人目を補充して、教育内容だけでもしっかり伝えていける体制を構築していただけると現状よりも良くなるように思います。

このようなことは、本学の人事システムからすると大学上層部の先生方に伝わらないといけなこともかもしれませんが、あえてここに記しました。

最後に、新潟大学歯学部ならびに所属する教員、職員、院生および学生の皆様のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

ありがとうございました。